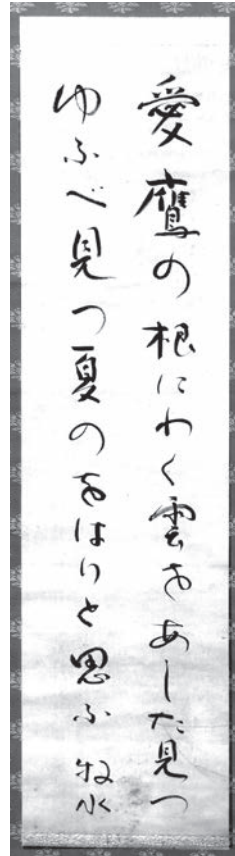


沼津市若山牧水記念館

第53号 平成26年9月15日 編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/



愛鷹の根にわく雲をあした見つ ゆふべ見つ夏のをはりと思ふ 牧水

この作品は、大正十二年に出された第十四歌集『山櫻の歌』の中の一首。『山櫻の歌』は大正十年の正月から十一年の十二月までの作品を載せる。この歌は沼津への移住の翌年、大正十年の秋口に詠われた「秋近し」十首中の九首目におかれている作品で、「愛鷹の根にわく雲を」と出て、「あした(朝)見つ」「ゆふべ(夕)見つ」とあえて時間差を持たせ、「夏のをはりと思ふ」と纏める。季節の変化を楽しむ歌人らしい発想であろう。

香貫山の麓の「牧水の家」の前から、当時は、狩野川越しに愛鷹山も富士山もよく見えた。愛鷹山という山は黒岳、越前岳、前岳、鋸岳、呼子岳、位牌岳、大岳、袴腰岳、愛鷹山の総称で、牧水の愛した山であり、何首も詠んでいる。

この半切は、昨年四月、神尾憲治元沼津医師会長の令室清美さまから戴いたものである。もとの持主は衆議院議員の勝間田清一氏で、その娘さんが清美さまである。清一氏がどうして手に入れたかは、不明とのことであるが、大事

に持っておられたそうである。正調な筆跡で格調の高い姿に牧水の気持が表れている。

大正十年は、前年八月に沼津に移住して最初の正月を迎えた年で、何人かの訪問はあったものの静かな日々を過ごしていた。ただ体調は思わしくなく、酒を慎まなければいけないと何度となく思いつつ、なかなかやめられない日々がつづいていた。故郷の母を想い、酒はほどほどにして、折りがあれば帰郷するつもりであると母に手紙を出している。しかし、次男富士人を身籠っていた喜志子の健康もすぐれず、九州行きは昭和二年の朝鮮方面揮毫旅行の帰りに立ち寄るまで果たされなかった。

酒の方は相変わらずで、四月には、田方郡田中村吉田(現伊豆の国市吉田)の歌人・穂積忠の家に滞在していた北原白秋を訪ねて痛飲、翌日「香貫の家」に白秋を誘って痛飲するなどなかなかやめられなかったらしい。

大正十年の三月に第十三歌集『くろ土』を発行、六月には『前田夕暮選集』を出し、同時に前田夕暮による『若山牧水選集』が出され、七月には名紀行文集『静かなる旅をゆきつつ』を出している。

『くろ土』の序文に、「これが真実の意味に於ける自分の処女歌集といふものかも知れない」と書き、『山櫻の歌』の序文の中では、『くろ土』は「動的の歌」であり、『山櫻の歌』は「静的の歌」であるらしく感ぜられる、とも書いている。この押さえはやや疑問だが、少なくともこの半切の歌は、「静的の歌」と言つてよいだろう。(須永秀生)

喜志子の歌にみる牧水 — その身体としぐさ 大口玲子



若山喜志子（昭和27年9月撮影）

三枝昂之さんの「牧水と啄木」という文章が、「館報」の第五〇号に掲載されている。三枝さんは「近代の歌人の中で友だちになるとしたら牧水」と述べ、その理由として「あの澄んだ目がいい」「あの目は人を裏切ることのない目である」と断言されていて、興味深かった。確かに、身近なところでは牧水研究会の機関誌「牧水研究」でも、印象的な牧水の写真は何枚も見ることが出来る。独特の風貌や表情には人間的な魅力があふれていて、その人となりをよく伝えているように思う。

写真は写真として、もつとも身近な存在であつた喜志子は牧水をどのように歌っているのだろうか。たとえば、一般的に喜志子の歌として知られているのは、次の二首だろう。

にこやかに酒煮ることが女らしきつとめ
かわれにさびしき夕ぐれ 『無花果』
汝が夫は家にはおこな旅にあらば命光る
とひとの言へども 『筑摩野』

「牧水の妻の短歌」という先入観をもつて読まれることが多いが、むしろ女として妻として求められていることと、本来の自分がどこかずれているという違和感を自覚的に詠んだ作品というべきだろう。それでも、喜志子自分を歌うことによつて、ある意味で牧水という人間が表現されているのであるが、この二首は観念的でやや理屈っぽすぎる感じもある。

喜志子の歌集を読んでいて、牧水の風貌やちよつとした動作の魅力がいきいきと描写されている歌に出会うとうれしくなる。それらは、ときに写真以上に牧水の気配や息遣いを

今に伝えるものである。

まず、喜志子の歌に繰り返し詠まれているのは、牧水の「額」である。

五月と云へばすべて新らしこそばゆし蒼
める君が額の尊とき 『無花果』
君がその着める額はきりぎしの真淵とな
りてわが生にむかふ 同
わが好む広き額を何ごとぞかきくもらせ
てしづみ給ふは 同

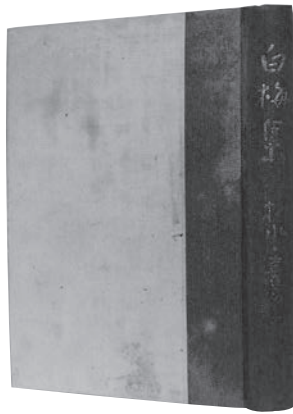
三首とも牧水と暮らし始めてから三年後、喜志子が二十八歳の時に出版された第一歌集『無花果』の作品である。喜志子は牧水の「額」が大好きだつたんだなあとほほえましい気持ちになる。

五月という何もかもがみずみずしくさわやかな季節に、牧水のおおあおとした額の美しさをあらためて発見している一首目。五月は喜志子の生まれ月でもある。新緑や新芽の鮮やかさと並ぶものとして「君が額」をあげ、どこか近寄りがたいような神々しさを感じているようだ。

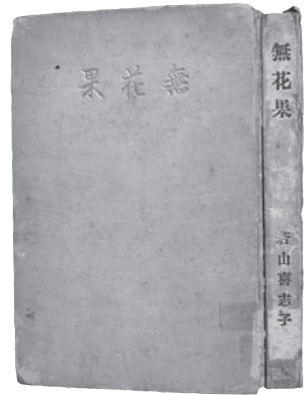
また、牧水の額は喜志子をうつとりさせたばかりではなく、ときに厳しさを感じさせるものであつたらしいことが、二首目からわかる。



歌集『筑摩野』
(昭和5年10月刊)



歌集『白梅集』
(大正6年8月刊)



歌集『無花果』
(大正4年12月刊)



歌集『芽ぶき柳』
(昭和26年6月刊)

三首目は、気持ちがふさいでいる時の牧水を詠んだもの。「わが好む広き額」とはつきりといっている。そして、牧水の精神状態をあらわすのに「額をくもらせている」とする表現がおもしろい。
次に、牧水のしぐさを詠んだ喜志子の歌をあげる。

なにはなく子の名呼びつつ机の塵払ふさ
びしき君を見しかな 『筑摩野』
幼等と呼ぶに得意の指鼓鳴らす明るき
父なりし君 『芽ぶき柳』

一首目は執筆の最中だろうか。牧水は机上の塵を払いながら子どもの名を口にする。「子」はこの場にはおらず、牧水は喜志子が見ていることを意識していなかったのだろう。仕事中にふと子どものことを思い出し、その

名前を口にした牧水の様子を、喜志子は「さびしき君」ととらえて印象深く記憶した。

二首目は、牧水が亡くなってから二十年後に作られた歌である。こちらは、実際に子どもたちを呼ぶ時に指をパチンと鳴らしていたという思い出であり、得意気な牧水の笑顔が浮かんでくる。いつもこのような感じで子どもたちの名前を呼んでいたのかもしれない。長女みさきのエッセイなどにも書かれているが、牧水は子どもたちの前でいつも明るく、機嫌のよいお父さんだったのだと思う。
喜志子が牧水に呼ばれる場面もい。

桑の葉にやどる夜露のかしこさを見に来
と夫のよびたまふなり 『筑摩野』
窓ごしにふと声かけてねち花のもじずり
草を夫は賜ひぬ 同

自分が見つけた美しいものを、妻と分かち合おうとする牧水。牧水が喜志子に見せたかったのは「夜露」であり、窓越しに贈ったのは「ねち花」であるということに胸を打たれる。ふと目にした光景や小さな植物の美しさを、二人はいつも共有してきたのだろう。長女みさきのエッセイ「父・若山牧水」の中には、牧水と喜志子の旅行中のエピソードとして次のような記述がある。

北海道のある牧場へ行った時のこととして聞いた、折りから夕暮れで地平線の彼方から雲のような固まりが近づいて来る、それが綿羊の群れで、夕焼けの中、鈴を鳴らして近づいて来る羊の群を見ているうち、まず母がしゃくり上げ、父も涙をこぼしたというような話を思い出すと……

夕焼けの中、羊の群を見て涙をこぼす牧水と喜志子の姿は、夜露やねぢ花を分かち合う二人の純粹さにつながっているように思う。素朴で初々しいこの二首は、どちらも喜志子が三十代後半の頃の作品。牧水は四十代に入っていた。

次は、牧水の足音を詠んだ歌。

長廊下の夜をひびかせ一すぢに君がスリッパ近よりてくる 『無花果』

いそいそと大地を鳴らし来る君の足の音より世にこひしきはなし 『白梅集』

こもりゐてただひとすぢに待つものかききおぼえたる君が足音 同

喜志子の年譜には「大正四年 二十八歳 一月月上旬、腸結核にて雑司谷永樂病院入院。同月末退院」とあり、一首目はその時に詠まれたものである。牧水は夜になってから、

スリッパの音を響かせて病室にやって来た。「夜をひびかせ」「一すぢに」「君がスリッパ近よりてくる」という表現からは、喜志子に会いたい気持ちを隠すことなく、子どものようにバタバタと足音をたてて病院の廊下を急ぐ牧水が目につく。喜志子も聴覚をときずませ、牧水の足音を今か今かと心待ちにしていたのだろう。

二首目と三首目は同じ一連にあり、自宅で牧水の帰りを待つ気持ちを詠んだもの。この頃、一家は何度も転居している。喜志子は幼い子どもを抱え、慣れない土地で、留守がちな牧水の帰りをいつも待っていた。「大地を鳴らし」「ききおぼえたる君が足音」という表現をみると、やはり牧水は普段も、あたりをはばからぬ大きな足音をたてていたのかもしれない。

いつもかも気にもとめなくありと思ひし我が黒髪を君は手なづる 『無花果』

最後にあげるのは、牧水が喜志子の髪をなでている歌。「木かげに髪を洗ふ」という小題があり、喜志子の退院後、転地療養のため神奈川県三浦郡北下浦に住んでいた頃の作品である。同じ頃、牧水のほうも髪を洗う喜志子を詠んでいる。

昼の井戸髪を洗ふと葉椿のかげのかまどに赤き火を焚く 『砂丘』
かたはらに昼の焚火の燃えしきりあをじろき汝がはだへなるかな 同

「妻の病久し」という小題があり、「あをじろき汝がはだへ」という表現からも、退院後の喜志子を気遣っていることがわかる。喜志子の黒髪をなでる牧水のしぐさには、妻に対する労りと慈しみがあふれている。

(注) 牧水研究会(事務局)宮崎市昭和町一九七一一長嶺元久方(会長)伊藤一彦

【筆者プロフィール】 おおぐち りょうこ



昭和四十四年東京生れ。早稲田大学第一文学部卒。平成三年「心の花」入会。平成十年作品「ナシヨナリスムの夕立」で第四十四回角川短歌賞、同十一年第一歌集『海量』で第四十三回現代歌人協会賞、同十五年第二歌集『東北』で第一回前川佐美雄賞、同十八年第三歌集『ひたかみ』で第二回葛原妙子賞、同二十四年、同二十五年に第四歌集『トリサンナイト』で第十七回若山牧水賞及び芸術選奨新人賞を受賞。仙台市に在住中に東日本大震災に遭い、宮崎市へ移住。平成二十六年三月に開催した第二十五回「籬の歌会」の講師。